

2018年8月10日発行
第28回
2018年8月10日発行

秋 AUTUMN
2018 AUG.8 Vol.643

特集 小説、何を書くかよりどう書くのか
津木林 洋

書評 たなかよしゆき「宇宙の愛」
中塚鞠子

小説 小説友達 藤本紘士
贗夢譚 稲葉祥子
ランドルト環 岡田智樹
小説の生まれるところ 染谷庄一郎

第38回
大阪文学学校賞受賞作
エッセイ・評論・ノンフィクション部門
祖母の来た道 西清治

三島由紀夫「潮騒」の新資料発見などについての報告
安芸宏子

資料 — 三島由紀夫「潮騒」の新資料内容(書簡について)

連載講座 小説表現の基本⑦
「語り」と「描写」はどう違うのか?
——「語り」の中に「現在の表現」を混在させることも可能
奥野忠昭

秀作の樹・個性の花
エッセイ
春はまだかしら?
ルワンダ ジェノサイド
—— 日本女性との交換記
水島 崎

うめのしとみ

小説 小説
ユリカモメの標的 栗城 結実子
光射すリヴィングルーム 浅沼 孝子
熱帯 森野 康子
木の牙どき 村上 美鈴

小説同人誌評 20
人間病の諸相 細見 和之
詩時評 10
「幸福の約束」としての詩 松本 崇司

樹林 2018 秋号

『あるかいど』第64号掲載の、高原あふち「人間病患者」も、崩壊に近づいていた家族の再生の物語を描いている。

小野寺博と妻の貴子は、ともに楽器メーカーに勤めているが、貴子のほうが大手で給料もずっと多く、博はいささか肩身の狭い思いをしている。おまけに貴子は自宅でピアノのレッスンもしていて、授業のとき博にはまずまず居場所がない。二人には海音(あお)という娘と律という息子がいる。海音は家を出てひとり暮らし。アルバイトをしながら劇団で活躍している。律は、ニューヨークでピアノストをしている。これにくわえて、博の父、香久山、海音が想いを寄せている一之瀬が重要な人物として登場する。博が大学へ入る時点で、母は香久山と離婚し、博は母の姓、小野田を名乗ることになったのだ。

その母も亡くなって十年後、音沙汰のなかった香久山が博に不意に電話をかけるところから物語ははじまる。ひとり暮らしの自分から専属のヘルパーのアルバイトを見つけてほしいというのだ。博はちやうどアルバイトの切れていた娘の海音を、「北高マヤ」という別人として父のヘルパーとして送り出す。

この作品では、一之瀬を除いて、節ごとにそれぞれの登場人物を視点人物として描かれている。それによって、いわばボタンの掛け違えのようなどころから関係の齟齬がすこしずつ拡大していったこと、それぞれが後悔の念を抱え、回復を願っていることが重層的に捉えられている。タイトルにある「人間病」は、一之瀬から「バツイチ」であることを打ち明けられて動揺している海音に、香久山が語る言葉に登場する。海音には海音で手痛い失恋をした過去があって、それがトラウマになっているのだ。香久山はその不安の先取り

を指して「人間病」と呼ぶのである。そう思ってみれば、今回ここまで紹介してきた作品はすべて「人間病」を描いているものとも呼べるのだった。

つまり、いちばん身勝手な生き方をしてきたような香久山が、作品でいちばん肝心なことを語っていることになるが、香久山として、その「人間病」への特效薬を知っているのではない。自分の気持ちを相手に素直に伝えること、香久山が海音にいえるのはそこまでであり、同時にそれこそは、香久山が長い生涯をつうじて、果たせなかったことなのだ。

物語の途中で、香久山は海音が自分の孫であることに気づくが、海音にはそれを知られたくないと考ええる。そこにも、現在における人間関係の微妙さが表わされている。今回第12号が届いている「mon」には、相変わらず力作が掲載されている。

同誌掲載の、飯田末和「あまごいむし」は、三十歳ぐらいの女性が東京での不倫関係を清算して、大阪で古道具を扱っていた叔父の小さな店を引き継ぐまでを描いている。

東京で暮らしていた「私」は、大晦日に久しぶりに大阪の実家に帰り、叔父の殺(たけ)る)と会う。気難しい父親より、独身のまま自由人の雰囲気をもっていた殺に、「私」は高校生のところから惹かれていた。殺は、自分が死んだらその店を継いでほしいと言う。その